

## 摺筆の辯

### 天涯茫茫生

「医事・文談」と銘打って、千回の余も文章を発表し続けたが、残念ながら断筆の余儀ないことになった。

理由は後述することとするが、止むを得ない理由が生じたのだ。

小生は本年3月19日の誕生日を以って、満100歳と相成ったのである。自分でも不思議と思うくらいの長命である。小学生の時は、おりからの世界的流行だったスペイン風邪に犯されしばし学校を休んだ記憶がある。学校が休校となったこともあったようだ。死者も多く出たらしい。それからもういろいろの病気にかかりながら、それらを凌いでこの年までできたのだから、幸運といつていいだろう。

一般には、長命はお目出たいということになっているらしい。小生も100歳お目出度うと、何人もの知人・友人から祝いの金品をいただき恐縮したものだ。なかには50年もの昔に、小生の診療を受けて大変ありがたかったという思いがけない方からのお祝まであった。札幌で有名な手芸店の方である。

しかし老化という現象はかなり早くからおそってくるものらしい。俗に歯、眼、あと一つなるとかいいう口にするのをはばかる俗諺があるくらいだ。そのとおり、小生の老化はまず老眼という近視のものがハッキリしない現象として表われた。眼鏡が必要となった。次にはやはり歯で、歯が虫歯で次々に欠けていき、總入歯となったの

は70歳の頃かと思う。あと一つもその頃からかと思うが、実行力は別として、美女を見て楽しくなる気分は、今に失せていない。誰でもそうかと思う。

85歳くらいのとき、両眼の白内障の手術を受け、それから最近までは、かなりこまかい活字面もまず不自由なく読むことができていたのである。

夜間なかなか寝つかれないときは、明方近くまで横になったまま本を読んでいたこともあったくらいである。

聴力はどうかというと、これもかなり早くから低下し、60過ぎの頃からいろいろの補聴器の厄介になつていくが、会議などの場合は聞きとり難く不自由のことが多い。今はドイツ製のシーメンス製のものを両耳につけている。電話はダメ。

読む、書くがなんとかできるので、「医事・文談」も続けることができたのである。ところが、一、三カ月前からテレビの字幕の下半分が欠けることに気がついたのである。テレビの故障かと思つていたところ、新聞、書籍の活字面がゆがんで見え、半分欠けることも発見したのである。これは眼の病気だ。眼科医の診察を受けねばと覚悟をきめたのである。

眼科専門病院の医師は、実に多くの検査をして、「加齢性黄斑変性」と診断を下された。眼科の知識のない小生には初めてきく病名であった。

説明によると、黄斑変性は、視覚障害者手帳交附の原因疾患のうち、第一位の緑内障、第二位の糖尿病網膜症、第三位の網膜色素変性に次いで第四位となる疾患で、決して珍しい病気でもなく、かなり多い病気のようなのである。

年をとって細胞が萎縮すればいいのに、却って脈絡膜血管が活発化するのが原因という、厄介な病気だという。

以前（それがいつ頃までかは分らないが）増殖を抑えることができなかったが、いまはルセンテイスという薬剤を硝子体に注射することで、新生血管の増殖や成長を抑えることが可能となったのである。

まずさしあたり一カ月に一度、三回注射を受けることとなり、第一回を5月10日受けた。三回後に判断すべきだろう。注射はチクツとするだけで、痛みは殆んど感じなかった。

効果については個人差があるとかで、失明に至る場合もあるそうであるから、小生も重大な覚悟をしておいた方がいいのだろう。完全失明とまではいなくても、本症の場合は「社会的失明」といわれるそうだから、日常生活に不便を感じる「失明状態に近い事態」になるらしい。

この文章も、文字がゆがんだり、半分欠けたりで、ループを紙面にあてながら四苦八苦して書いているのである。もう「医事・文談」を続けることはむづかしい。甚だ残念であるがいたしかたない。若し三回の注射のあと視力や書字力が回復することができたら、続稿を書くとお約束して、一たんの摺筆の辯といたします。

注射は第二回を6月7日、第三回を7月5日に受け、目下、効果如何を待っているのである。医師の診察によると視力が少し良くなっているとのことであるが、小生の判断ではテレビの字幕も、新聞の細かい記事の活字もまだ判然とせず、新聞や本はループを当てて読んでいる次第だ。

「医事・文談」が、発病以後も前号の壱千二百六まで発表できたのは、それまでに書き溜めてあったからである。

末筆ながら、長年月にわたり「医事・文談」のほかにも、紙面を提供していただいた北海道医師会に深甚の謝意を表します。

（二〇一〇・七・九・記）